C. BECHSTEIN KLAVIERSCHULE
ベヒシュタイン シューレ
Nr.2 2020.8

ベヒシュタインから見える風景

～音楽表現の上達のヒント、ベヒシュタイン・ジャパン主催イベントのレポート等をお届けします～

BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

ピアノ教育の現場から——

ベヒシュタインピアノの特性を活かしながら音楽をより深く理解するピアノ教育を実践している内藤晃先生と石本育子先生のお二人に、誌上特別レッスンとして今号より連載いただきます。音楽表現の可能性をいかに引き出していくのか、ぜひご注目ください。

弊社ベヒシュタイン・ジャパンの正規代理店 たかまつ楽器さん（高松市）では数年前から「青い鳥マスタークラス」が開講されています。このマスタークラスでは石本育子先生による授業と、定期的に特任講師内藤晃先生のレッスン・授業が行われています。このレッスンと授業の相乗効果を、受講生の子供達の魅力的な演奏を聴くことで確信することができました。旋律の抑揚からイメージできる人の会話や、その響きが造る感情の機微は、ピアノの技巧的な部分にフォーカスされた演奏からは決して感じられないものです。

その演奏を支えるのはピアノです。多くのピアノ楽曲が作られた時代のピアノの重要な特徴をどこかに置いてきてしまったピアノしか知らない状態で、果たしてその音楽を通して作者が放出したかった感情は理解され表現できるか？と考えると疑問が残ります。ベヒシュタインをはじめとするヨーロッパの一流と呼ばれるピアノは、ピアノ演奏芸術が開花した19世紀のピアノ製造が求めた楽器としてのピアノの本質を、常にその時代の要求に適合させながら継承しています。何が良いのか、何故良いのかは、求めるものがなければ理解できないものです。その、求める表現の可能性を引き出す授業とレッスンがこのマスタークラスでは行われ、その教育方針にふさわしいピアノとしてベヒシュタインが使用されています。

（加藤 正人）

隅々までを意識して弾くということ。

内藤 晃
（ピアニスト）

石本 育子
（たかまつ楽器ピアノ講師）

加藤 正人
（ベヒシュタイン・ジャパン代表）

内藤：実は、ベヒシュタインって、弾き手の意識が行き届いていない部分をあぶり出しちゃう、こわいピアノなんですよ！

石本：そういう場面、レッスンでいつも見ています。本人が気づかない音楽的理解の度合い等全てお見通しな楽器。それをレッスン内で指摘すると、びっくりされ、そして急激に変わってくれます。
例えば、弾き手がメロディライン等『出したい音』として拘って打鍵した音達が、実は頑張り過ぎると耳にうるさい音として聴こえてくるんです。メロディラインって何でもかんでも出せばいいものではないのはある程度やってる人ならわかってくるけれど、ちょっと大きすぎるとか、ちょっと解放が遅いとか、を許してくれない楽器。それを最初は指導者が示唆するのですが、いつもベヒシュタインを弾いていると弾き手自身が気づくようになる。

内藤：アンバランスだったり抑揚がおかしかったりするのが、そのまんま音として出てきますよね。ピアノが助けてくれないんです。でも、隅々まで意識を行き届かせて弾くと、どこまでも微細なニュアンスで応えてくれる。アラが目立つというのは、実はすごく反応がいいということなんですよね。

加藤：そうですね。お感じになっているようにベヒシュタインはハンマーが打弦した瞬間の音の立ち上がりが早いです。これは、響きを拡張する音響部位全体の構造の特徴にあります。
また、整音という音を整える作業がありますが、小さな音での音色の変化も明確に出るポイントを探りながら行います。声のように多彩な抑揚をつけたいわけです。これはベヒシュタインの独特な倍音構成があるからこそ成せる技でしょう。

内藤：このような反応のいい楽器だと、出したい音色を探ってるうちに子どもたちの音へのアンテナが研ぎ澄まされていきますね。

内藤　晃
（ないとう あきら）

ピアニスト、指揮者、作編曲家。東京外国語大学ドイツ語専攻卒業。在学中よりピアニストとして演奏活動を始め、桐朋学園大学指揮教室、ヤルヴィ・アカデミー（エストニア）などで指揮の研鑽も積む。
弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載。訳書にA.ゲレリヒ著「師としてのリスト」（近刊、音楽之友社）、校訂楽譜に「ジョン・アイアランド ピアノ曲集」「13人の女性によるピアノ小品集」（カワイ出版）などがあるほか、音楽雑誌やCDライナーノートの執筆も多い。札幌シンフォニエッタ、アビアント交響楽団、杉並グース合奏団などを指揮。2014年、全日本ピアノ指導者協会から新人指導者賞受賞。一次資料から作曲家の美意識を読み解く独自のレッスンが各地で好評を得ている。
CDに「Primavera」（レコード芸術特選盤）「言葉のない歌曲」（同準特選盤）などがあるほか、マリンバ吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。主宰ユニット「おんがくしつトリオ」では教育楽器によるエキサイティングなアレンジが人気を博し、全国各地に招かれている。
www.akira-naito.com

石本 育子
（いしもと いくこ）

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科を経て武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。古屋豊、川内澄江の各氏に師事。
東京・浜松・香川において数多くのコンサートに出演するだけでなく、自主企画の演奏会を立案運営。独自の指導法による連続講座をピアニスト内藤晃氏と共に汐留ベヒシュタインサロンにて開催。
たかまつ楽器青い鳥音楽教室主事。青い鳥マスタークラス主任講師。四国二期会会員。
全日本ジュニアクラシック音楽コンクール及び東京国際ピアノコンクール審査員。

加藤　正人
（かとう まさと）

ドイツ・ピアノ製作マイスター称号を取得
現在ベヒシュタイン・ジャパン代表取締役社長

石本：隅々までの意識、まさに最近の指導で核にしているところです。脳をフル回転させないとできないことでもありますが。だから、見学してるお母様がきょとんとされることがあって(笑)生徒がたった一回弾くと疲れてヘロヘロになって私が「『よく頑張ったね、ブラボー』この曲終わり」みたいな。

内藤：そう、脳を使うんです！フレーズを歌うとき、その行き先を見据えて歌い出さないと自然な抑揚が作れない。和声に沿って音色をふっと翳らせたいとき、1-2拍前あたりからその行き先が意識できていないと、間に合わない。手がいま弾いているところと、脳が感じているところは、時差が必要なんです！

石本：時差、すごく重要だと思いますね。その時差の長さ？も次にどんな音楽があるかで変わってきますし、次の音楽をどう理解しているかも、その時差の取り方でわかってしまう。指導者にとってもわかりやすい有難い楽器です。

内藤：無神経な弾き方をしてしまってもある程度いい音で返ってきちゃう楽器があるなかで、ベヒシュタインは、脳からの指令が間に合ってないときと間に合ったときで、音色が如実に変わりますね。

加藤：先に説明した音の立ち上がりの速さと、もう一つ、響きに透明感があることも音色の変化を大きく感じる要素の一つでしょう。響きに透明感を出し、音域による響きの違いを作りやすくする独特な響板構造がベヒシュタインの特徴です。
この構造部分をベヒシュタインでは、グランドピアノではメインリブ、アップライトピアノではレゾネーターと呼んでいます。これは、響板内の振動伝搬を区切る独特な響板工法で、他に例を見ない響きの体験を実現します。ダンパーのハーフペダルなどで音を持続させても全体的に響きがすっきりしていて全体の響きが濁りにくいことと、演奏の方法により、音域別に響きの感じを変えやすくなります。
この響きの音域感は18世紀～19世紀当時のピアノが持つ特徴でもありました。ピアニストは全体の響きの中に旋律的な流れと和声的なバランス双方を意識しながら音楽を進めていくと思いますが、音の置き方をベヒシュタインははっきり見せてくれるはずです。

内藤：音の置き方、おもしろい表現ですね。確かに、ベヒシュタインは、響きの奥行きのなかでどのあたりか、音の位相・遠近感がわかりやすいです。ところで、石本先生が実践されてる、脳からの指令に必要な時差を子どもに体得してもらうためのアプローチについて教えていただけますか？

石本：実は少し変わったソルフェージュ指導をしています。リズム課題で１小節のまとまりを幼児期から吸収すること、前の小節の最終拍で次の小節全体を思い描くこととそれを叩くことの準備ができる脳を育てます。いつ指令を出すか、もとても重要ですが、次の音楽をイメージできる力も同時に育てたいなと思っています。

内藤：そうですね！とりわけ大事だと思うのは、鍵盤上で音にしなくても楽譜を音楽として脳内再生できる能力、そして、音楽の全体像を描く能力です。

石本：はい。そういう意味で、マスタークラス授業でも構造の理解は重要度高いです。『森も木も』見えるように、です。

内藤先生、石本先生がお感じになっているベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、
実際どのように子どもたちに音楽を理解させていらっしゃるのか、
誌上レッスンと動画をリンクして公開いたします。